

教職課程の生活科に 「モルモットのふれ合い体験」を取り入れた実践報告

小林 道正

要旨：生活科では1年生と2年生で、動物を飼育する活動を行うことになっている。教職を目指す学生には、動物との関わり方や飼育の仕方を理解し、子どもたちに指導できることが求められる。そこで教職課程の生活科教育法に「モルモットとのふれ合い体験」を行った実践を報告する。

1 生活科で行われる飼育活動

生活科では、動物を飼育する活動を通して、それらが生命をもっていることや成長していることに気付くとともに生き物への愛護する気持ちを育てることが目標の一つとしてあげられている。その際、関わりが深まるように継続的な飼育を行うような配慮が求められているが、飼育する動物の種類や期間については具体的に明記されていない。それは、地域や児童の実態などによって各学校の判断に委ねられている。以上のことは小学校学習指導要領と解説生活編のとおりである。

生活科の教科書は、8社の教科書出版社から発行されている。全社とも上下巻に分かれており、特に指定はないが上巻は1年生、

下巻は2年生が使用するような内容になっている。そして、動物飼育の活動は全ての教科書で上巻と下巻で行われている。つまり、動物飼育の活動は1年生と2年生のどちらの学年でも実施している。

教科書8社のうち、5社が上巻でモルモットと児童が関わり合っている場面を掲載し、世話の仕方を説明している。

掲載されている動物の種類は、上巻ではウサギ、モルモット、チャボ、ニワトリなどの哺乳類や昆虫（バッタ、コオロギ）、ダンゴムシ、昆虫（トンボ、チョウ）などで、子どもたちの身の回りで見られる生き物が数多く紹介されている。

各学校では、上記の学習指導要領及び解説や教科書をもとにして、地域の環境や児



特集

童の実態を考慮して、動物の飼育活動を具体的に計画し実施することになっている。

2 モルモットにした理由

本研究会の中心メンバーであった故中川美穂子氏は、モルモットを推薦していた。理由は、抱き心地が良く、優しい性格で甘えて鳴くので楽しみが多い動物だからと言っていた。小心もので、幼いときから穏やかに扱うとなついてきて、人を見ると寄ってくるので親しみが持てる。特に、モルモットは跳躍力が無いので、蓋のない衣装ケースやケージなどで教室内飼育が可能ということが、低学年の児童が自分の力で丁寧に愛情をもって世話をすることができるということが最も大きな理由だったようだ。

モルモットはレンタル業者から1週間の期間で借りた。借りるときには、業者の飼育所を見学し、健康状況や個体の性格などの説明を受けて選定している。

3 触れ合い体験の実際

S女子大学の生活科教育法は半期14回の講義である。その中で、飼育活動に関わる内容は2回である。「モルモットのふれ合い体験」は2017年から始めて今年で5年間継続している。

1回目は、大学校内の草むらで「虫取り体験」を通して昆虫の教材性と野外活動の指導法について追究した。そして動物アレルギーの有無を問うアンケート調査を行った。もし動物アレルギーがある場合の対応として、距離をとった見学と、別室でオンライン受講を想定して学生の希望を聞いた。

2回目は、動物飼育の教育効果について解説し、「モルモットとのふれ合い体験」を実施した。事前指導として、次ページの「ガイドライン」の資料を使って、モルモットとの関わり方や子どもに指導するときの配慮事項などを説明した。事後指導としては、学校飼育動物の現状や問題点について解説した。

受講した学生の反応は、バツヤやコオロギは素手で捕まえることができなかったが、

モルモットには触れたという学生が大半である。そして、温かい体温に触れたり心臓の音を聞いたりして「生きている事を実感した」と感想を述べていた。



心音拡声器で心臓の音を聞く

4 まとめ

体験を通して指導することは、準備から指導の実際まで大変時間のかかるものである。そして目標を明確にして実施することが教育効果を高めることに繋がるものである。また、動物飼育の大切なことは、教師自身が動物に対して愛情をもって接することで、子どもたちに対して模範を示すことである。学生にはそのことをしっかり伝えていきたい。

次ページの「ガイドライン」の資料は、公益社団法人群馬県獣医師会の作成している「ふれあい指導案」と「ふれあい実施マニュアル」を参考にしました。

(本会運営員／聖心女子大学非常勤講師
／元国立吉備青少年自然の家所長)

特 集

以下の資料は、公益社団法人群馬県獣医師会の「ふれあい指導案」と「ふれあい実施マニュアル」を参考に作成し、S 大生活科教育法の授業で活用しました。

生活科「動物ふれあい体験活動」の実践マニュアル ～モルモット～

- 何をどのように学ばせたいのかという目的と方法を明確にして行いましょう。 ●●
- 教科の目標や教育課程における位置づけを明確にして行いましょう。 ●●

◆モルモットの選択と健康チェックについて

- ①人に慣れていて、性格が温厚で抱っこしても暴れないモルモットを選別して実施する。
(咬む・暴れる・抱っこ嫌いは不可)
- ②動物福祉の観点から、モルモットを抱く時間を制限して実施する。
- ③健康診断を定期的実施し感染症等の病気がないことを確認し、健康な動物との触れ合い体験を実施していることを事前に案内する。
- ④当日の健康状態を確認する。
(目やにがない。耳垢が溜まってない。毛並みにツヤがある。爪が長く伸びていない。体の汚れやお尻が糞尿で汚れていない。等)

◆実施の注意事項と抱き方の説明

- ①人と動物の共通感染症予防の観点から、ふれあい体験活動の、事前・事後に手洗いとうがいを実施する。
- ②モルモットを抱くときは、床に座って腿(もも)の上に乗せるとよい。
- ③モルモットは臆病な動物なので優しい気持ちになって、静かに抱いたり触れたりする。
- ④モルモットの口の前に指を出したり、口を触ったりしないようにする。
- ⑤指導者がモルモットの抱き方の手本をやって見せ、子どもの側に寄り添って補助するとともに、優しく抱くように言葉がけをする。
- ⑥モルモットを安心させる為に、優しい声で呼びかけながら体や顔を撫でてから、お腹の下の方から両手を差し入れて、包み込むように抱き上げ、腿(もも)の上に乗せるとよい。
- ⑦体に密着させて抱くのがポイントで、タオル使用等の個別対応は適宜行うようにする。
- ⑧聴診器で心音を聴かせる場合は、動物に負担を掛けないように心がけ、心臓の位置や聴診器の当て方などを教えながら行う。
- ⑨野外で実施する場合は、スタンドペットゲート等を使用して逃走防止のための囲いを設置する。



お尻をのせて、お腹と背中を支える



体に密着させて抱くのがポイント

モルモットの基礎資料

◆モルモットの生態と性格

モルモットはもともとアンデス地方の高地で穴の中で集団生活していました。植食性、夜行性で捕食される動物でしたので臆病な性格です。大きな声を出したり、無理に捕まえようとしたりすると驚いて逃げます。優しい声で呼びかけながら、おやつをあげたり頭を優しく撫でてあげたりしましょう。



◆捕まえ方と抱き方

いきなり捕まえようとするすると怖がって逃げてしまいます。特に、上から近づくものに警戒しますから、驚かせないようになるべく下の方から両手でお腹にそっと手を入れ包み込むように抱っこします。優しい声をかけながらそっと近づくと落ち着きます。両手で抱き上げたら、片手にお尻をのせて、もう一つの手でお腹と背中を支えてあげます。そして、抱っこする人のお腹とモルモットの身体をぴったりとくっつけるようにすると安心します。

抱こうとする人の不安な気持ちがモルモットに伝わるようで、人が不安がったり中途半端に抱こうとしたりすると、モルモットもイヤイヤをして逃げてしまうことがあります。愛情と自信を持ってしっかりと抱っこしてあげましょう。

抱っこしているときに誤って落としてしまうと、モルモットは足を痛めたり、顔面から落ちて歯を折ったりしてしまうことがあります。ケガをさせないために床に座って抱っこしましょう。タオルを腿(もも)に敷いて抱っこするのは人もモルモットも安心するので適宜取り入れると良いでしょう。



◆鳴き声やしぐさ

頭や顎を毛並みにそって撫(な)でてあげます。撫でてあげると気持ちよさそうにして目を閉じて落ち着きます。嬉しいときにはキューキューと鳴いたり、フイフイと鼻を鳴らしたりします。お尻をさわると嫌がるので止めましょう。怖がっているときはグルグルと喉を鳴らしたり、キューイキューイと高い声で鳴いたりします。触れ合いの時間が長すぎるとモルモットのストレスになり疲れるので 30 分～1 時間程度にしましょう。